

## ■ 母からの愛 私からの愛 ■

長野原町立東中学校 3年 中村 百花

その時、母の涙が私の服の一つ、また一つとシミを作っていました。私が親のことを「嫌だな」とか「うざったい」と思うようになったのは、いつ頃からだったのでしょうか。事あるごとに口げんかばかりしている私と母。原因は、私より妹の方が大事にされているという、勝手な嫉妬でした。私の両親はどこまでも末っ子だったため、長女で何もかも我慢させられている私の気持ちなんてわかってくれないと、勝手に決めつけていたのです。

小学校六年生の頃、家の都合で祖母の家に帰っていた私。友達が遊びに来るのも祖母の家でした。当時の私は友達から嫌われたくない一心で「遊びに行ってもいい？」と聞かれて断ることなんて思いもしませんでした。最初は仲良く遊んでいたり、お菓子を食べたりしていました。しかし、だんだんに遊びの域を超え、嫌だと思うことでも、私は従うようになってしまったのです。息がつまるようなその時間を、いつになったら終わるのだろうと、毎週、毎回、ただ耐えて、我慢していた自分。あの時の状況を誰かが見たら、「いじめ」だと判断すると思います。しかし、私はそう判断をしませんでした。その理由は、同情する周りの人の目が嫌だったから。そして、何よりも、両親に知られるのを恐れたからでした。

その頃から妹へ嫉妬し、親に対して反感をもっていた私は、絶対に知られてはいけない、心配をかけてはいけないと、生まれて初めての決意をしました。しかし、苦しい現実には耐えられなくなり、スクールカウンセラーに相談した私は、数日経った頃に先生に呼び止められることとなりました。事情を詳しく聞かれ、あまり口には出さなくなかったものの、ポツリポツリと話し始めました。たくさん時間が経つ中、「お父さんとお母さんに話してもいいか」と聞かれた時は、瞬時に首を横に振ったのを覚えています。

親に知られたくないという思いがとて強かった私。話さないでほしい。そう言い続けましたが、先生からの説得によって、渋々、話すことを了承しました。

日曜日。母に呼ばれ、何があったのか話してほしいと聞かれた私は黙り込みました。家の中に響くテレビの音と、家の横を通る車のエンジン音。ほんの一瞬のことだったとしても私にとっては、長く、辛く感じる時間でした。重い口を開け

て私はゆっくりと話し始めました。今まで親に話してはいけないと思っていた私だったけれど、全部、何も隠さずに話しました。

先生に話す時には出てこなかった涙が、今まで溜まっていた分、全てが、母の服に「苦しい」「辛い」と叫ぶようにシミを作っていました。そして、母の涙も私の服の一つ、また一つとシミを作っていました。

「どうせ親なんて一番下の子をかわいがるんだ」と思っていた私には、母の涙にどんな意味が込められているのかなんて、少しも分かりませんでした。母が口を開きました。

「大変だったね。辛かったね。ごめんね。」

そう。私は母から嫌われてなんかいなかったのです。母は私に、妹と同じ、いえ、もしかしたらそれ以上の愛情をもち、私を見守ってくれていたのです。「ごめんね」には、見守っていても小さな変化に気づくことのできなかつた後悔が込められているのだと、今になって思います。

私は思春期にさしかかり、感じたことや思った物事を素直に言うことができませぬ。そこで、大人のみなさんをお願いしたいことがあります。どんなことがあっても、私達を見守り続けてください。小さな変化があったら、話しかけてください。そうすれば私達は閉じてしまった扉を開けることができます。もしも、扉を開けてもらうことができなかつたら、扉を開けてもらえるまで、優しく、そばにいてください。それだけで私達の心の支えになります。

そして、私と同じ思春期のみなさんにもお願いがあります。確かに親はしつこく、わずらわしいと私も思ってしまうことがあります。しかし、自分が困ってしまった時には助けを求めてください。両親は絶対に、全力で私達を助けてくれます。そして、普段の生活で自分を出してください。私達は親に対して、反発したり、素直になれなかつたりすることもありますが、心の中では母と父とはとても素晴らしい存在であり、なくしてはいけない存在だと気づいているのではないのでしょうか。みなさんも私と一緒に、一番身近で一番大切な両親のいいところを見つけてみませんか。そして、私達からの愛情を伝えてみませんか。

「ありがとう」と。